

Gabriele Brandstetter,
Poetics of Dance: Body, Image, and Space in the Historical Avant-Gardes
 (Trans. Elena Polzer with Mark Franko)

中 島 那奈子

今から15年前に、原著である *Tanz-Lektüren : Körperbilder und Raumfiguren der Avantgarde* (舞踊のレクチュール, アヴァンギャルドにおける身体イメージと空間像) を東京の図書館の棚の奥に見つけた。どういう経緯でこの本を探したかは記憶にないものの、懸命にドイツ語の辞書を引きながら、冒頭の件を読んだ。ドイツのダンス理論書が、ラフカディオ・ハーンの白拍子の事例で始まるとは——その話をドイツから来ていた音楽学者に話したところ、この本の著者とは長年の友人であるばかりでなく、もう直ぐ来日するという。紹介されて、初めて著者のガブリエレ・ブランドシュテッター教授に会ったのは、彼女がライブニッツ学術賞を受ける1年前のことだった。その後、アメリカ留学を経て、教授が立ち上げたベルリン自由大学の舞踊学科で博士論文を執筆することになった私自身の経緯は、この本が白拍子の話からモダンダンスを経由して、ヨーロッパのダンスでの知覚の危機を描く行程と、不思議なほど一致していた。

パイロイト大学に教授資格申請論文として提出されたブランドシュテッターによるこの『ダンスの詩学』は、ドイツ舞踊学の先駆的研究である。出版当時の1995年はまだ、舞踊学という分野はドイツで始まったばかりで、個々の芸術家の専門書や、ダンスのテクニカルな議論が、文化的なコンテキストと切り離されたところで行われていた。そのような状況で、文学、視覚文化、哲学、演劇、ファッション、文化理論を繋ぎ合わせて、学際的にダンスを言説化したこの書は、ドイツでの文化学のあり方をも示唆したと、この本の記者の一人、アメリカ人の舞踊史家マーク・フランコが記している。

ダンスをテキストとして読解するという記号学的、ポスト構造主義的方法は、既に1986年にアメリカ・カリフォルニア大学のスーザン・フォスターが *Reading Dancing: Bodies and Subjects in Contemporary American Dance* の中で、同時代アメリカ人振付家の事例を用いて行っている。ブランドシュテッターのこの研究も、本人が記しているように、フォスターによるダンス理論を、ドイツのコンテキストに導入し、視覚文化や文学へと更に拡張したものと捉えられよう。

ブランドシュテッターはダンスの読解をまず、書くことと読むことが同時発生するものとして捉え、それを行う二つの基軸として、パトス定型 (パトスフォルメル) とトポス定型 (トポスフォルメル) というアビ・ヴァールブルクの図像学の概念を適用する。ヴァールブルクが、パトス定型の理論を構築したムネモシュネプロジェクトにおいて用いた「想起的キネーシス」という図像学の概念 (記憶そのものが動き出す、もしくは記憶は動きから成立している) を、理論的方法論的アプローチとして提示している。

内容は、第一部の「パトス定型——身体イメージと踊られた形象——」と、第二部「トポス定型——ダンスの動きと空間の形象——」に大きく分けられる。本書の三分の二を占める第一部では、1900年頃に生じた、主体を巡る問題と、モダンダンスと共にデザインされた、身体イメージを巡る問題を扱う。ヴァールブルクによるパトス定型とは、人間の情念の原初的表現として、集団の文化的記憶が視覚的に刻印されたもので、ブランドシュテッターは、これを身体と動きの分析に応用する。このパトス定型は、ダンスにおいて、二つの異なる典型モデルとして現れてくる。まず一つ目は、ギリシャのモデルと呼ばれ、パトス定型がモダンダンスの動きで自然や自然らしさのパターンとして再活性化されたものである。二つ目は、エキゾチックなモデルというもので、これは外の文化や他者との遭遇によって展開した身体イメージである。新しい人間としての主体の構築を目指したモダンダンスにおいては、この主体と自然という概念は密接に関係しあいながら、この二つの典型モデルへと連結された。

第一部第1章「美術館におけるダンス」では、19世紀末のヨーロッパ文化の危機を表したホフマンスタールの文学作品『チャンドス卿の手紙』をボート・シュトラウスで読解することから始まり、モーリス・エマニュエルによるギリシャ舞踊での動きのカタログ、デルサルトシステムをアメリカに普及したジュヌヴィエーヴ・ステピンズの理論に触れながら、アレクサンデル・サカロフが描いたジェスチャーのスケッチや、イサドラ・ダンカンやマタハリ、ロイ・フラーなどを挙げてモダンダンスの誕生を、古代美術のアーカイブから辿っ

ていく。ヴァールブルクとの比較を通じて、ホフマンスタールの『ギリシャの瞬間』を脱構築への道程として想起と忘却を結びつけていく論述部分は、著者のドイツ文学者としての気迫を感じさせる。

第2章では、ダンスの衣装とダンスの改革を結びつけて、女性らしさについて言説化する。衣装の改革は衛生状態、コルセットなどからの身体の解放、美学上の議論と重なりながら、女性の服装の改良に繋がっている。ここでは、ショールやヴェールも、ダンスそのものと同じように、動的な意味を作り出しそれを再配置する暫定的な行為と関わっているという。身体は形の定まらない衣装に輪郭を与えながらも、衣装はその運動によって身体の輪郭を解体し、身体がいわば織物の織り目の中へ変容していく抽象化のプロセスを作る。ダンカンヤルース・セント・デニスも愛用したガウンやショールをデザインしたマリアーノ・フォルトニーや、そのドレスについて記したマルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』、ガブリエレ・ダンスンツィオの小説がここでは言及される。続いて、身体イメージの古典的モデルとして、ポッティチェリやダンカンのプリマヴェーラ（春）、サモトラケのニケ像、メナード（マイナス）の図像が論じられる。身体イメージの二つ目であるエキゾチックなモデルとしては、エロチックなパントマイムであったスタシア・ナビエルコウスカによる『ミツバチ』の記録や、ダンスンツィオによるイザベラのミツバチダンスに関する記述、そして文学や絵画で広く扱われたサロメによる誘惑のダンスが取り上げられる。

第3章では、狂喜としてのパトス定型によって、ダンスにおけるコントロールとその欠如、自我の分裂と溶解が論じられ、自己が溶解するモデルとして旋回ダンスを、変容するモデルとして炎のダンスを挙げている。前者ではメアリー・ダグラスやゲオルク・フックスの例を引きながら儀式的、トランスが生じるダンスと、デルヴィッシュの旋回舞踊が、マリー・ヴィグマンの表現主義舞踊に与えた影響を論じ、後者ではガストン・バシユラールやホフマンスタールの『エレクトラ』、リルケの『スペインの踊り子』、ポール・ヴァレリーの『魂と舞踊』を参照しつつ、動きを介して身体と想像の世界を繋ぐメタモルフォーズが、火のモチーフと結びついていたことを記述する。

20世紀の初めに、ダンスは文学に代わる新しいクリエイティビティとして注目され、ダンサーはそれを体現するミュージシャンとなる。第4章では、ヴァレリーの『ドガ ダンス デッサン』を掘り下げ、ダンスの動きを有形化するメディアとしてのメイエルホリドのビオメハニカを挙げながら、マラルメの『ディヴァガシオン』での踊り子と踊る女の

議論上に、ヴァレリーにおける踊るメデューサが、詩の源とその理論の双方、つまりダンスでもダンサーでもあると位置付ける。最後に、ロベルト・ヴァルザーやトーマス・ベルンハルトの例を挙げ、ここでは記号が崩壊し、踊らないダンサーという静止のパトスが追求されるものの、コード化されないイメージや表現形象への飽くなき探求が認められるという。

第二部の「トポス定型——ダンスの動きと空間の形象——」では、身体の変容と脱構築に焦点をあて、ダンスにおいて典型的な空間の定型がどう作られるかを検証する。具体的に、身体イメージが抽象的な形象へと変容していく様子を描写する。ここでは、迷宮とスパイラルの二つが、身体から空間へ、個人から集団へ、そして動きからシンボルへと移行する象徴的な形象とされる。まず、第1章でフラーの『蛇のダンス』とマラルメによるその分析、フォルトニーやダンスンツィオによるヴェールや衣装の記述、バレエリュスでのレオン・バクストの装置やカール・アインシュタインによる記述を結びつけながら、フラーによる空間構築の対照例として、オスカー・シュレンマーの『トリアディック・バレエ』を挙げる。

第2章では、ダンスにおける抽象化の過程を、20世紀の振付の展開を通して観察する。ここで抽象化とは、演劇上演の模倣的概念からそれ自体を切り離し、伝統的な演劇での各芸術分野のコラボレーションを分離する、双方を意味している。具体的には、未来派の影響を受けたヴァランティネ・ドゥ・サン・ボワンによる舞台振付作品が古典バレエだけでなく、新しいモダンダンスにも対抗する抽象化がされていたことを詳述する。

そして第3章「航空ダンス、未来派のダンスと航空技術」では、飛翔への希求が重力を乗り越えようとする欲望と相まってダンスとなることが論じられる。マリネッティは「未来派ダンス宣言」の中で、フラーのダンスを絶賛するが、自作『女性飛行士のパントマイム』のダンサーこそ、身体の機械化と機械的なものの身体化という未来派の主体の構築であった。

第4章「ダンスを書くことと空間的に書くこと——アルファベットとトポス定型の狭間——」は、書かれたダンスと、ダンスによって描かれた空間というメディア、の二つを扱う。ここでは、身体運動を含めた世界一切を分析し読解する舞踊譜を編み出したルドルフ・フォン・ラバンを基軸に据える。そして、彼のシュリフトタンツの意味を拡大した、ダンスを創造する文字という特徴を、ミハイル・フォーキンの『カーニバル』や、ダンサーのアカロヴァの振付に見出していく。

最後の第5章「中断」においては、写真や映画、編集などでの分断化の技法が、アヴァンギャルド

の演劇やダンスにおいて身体と動きの概念に翻訳されることを、チャーリー・チャップリンやメイエルホリド、ヴァレスカ・ゲルト、バレエ・スエドワの例を挙げて説明する。プラントシュテッターは、アヴァンギャルドの演劇やダンスはもはや総合芸術としての統合を希求せず、分離個別化された芸術の様式間に衝突を引き起こす中断を基盤にする知覚パターンから構成され、観客も、その意味を能動的に作り出すと結論づける。これに続く結びにおいては、メグ・スチュアートやウィリアム・フォーサイスによる同時代のダンス作品へと議論を接続し、この本で歴史的資料を用いて論じてきた、それまでのダンス研究をも、未来のアヴァンギャルド誕生の夢へと、潔く昇華させていく。

ダンスを読むことがダンスを作ることになる——ダンスとテキストとイメージを巡る膨大な資料を用いて、ダンスにおける近代の幕開けを、世紀転換期ヨーロッパの歴史的アヴァンギャルドで読解した画期的なこの研究書で、プラントシュテッターはそう主張している。そしてそれは、目の前の踊れない老婆が20年前に白拍子として美しく舞う姿を、記憶を頼りに描いた画家を巡る、ハーンの冒頭の逸話に立ち返る。想起による身体イメージの創造と消滅は、ダンスと文学、身体イメージと空間の形象、の接点であるだけでなく、ダンサーの老いの過程にも繋がっていた。

(Oxford University Press, 2015年4月刊行)